

なかったのが不幸中の幸いであったことを報告されました。鳥取県の消防は、広域体制を推進しており、今回も西部以外の東部・中部の消防局は応援出動の準備をして待機しており、今後、さらに県と一体化した体制をすすめるとともに災害拠点病院のヘリポート整備が重要課題であるとの提言をされました。

植田俊幸氏は、人的被害が少なく、ライフラインが早急に復旧したこと、地域社会がしっかりしていたこと、専門家やボランティアの積極的な働きかけがあったこと等が心の健康を保つうえで大きな役割を果たしたとの見解をだされました。さらに、被害に地域差や個人差が大きいと、少数ながら心の変調をきたしている人を見逃されやすく、専門職の人々の疲労が高まりやすいことについては配慮が必要であるとの指摘をされました。

これらの報告後、会場やパネリストから質問がだされ、受け答えする中で、時間がきてしまいました。このセッションの内容は、時間内では収まりきれない濃い内容でした。

通常の地震災害のシンポジウムでは、地震の起きた原因やその被災の状況を、専門家の立場から報告することが行われていますが、今回、NHK解説委員の藤吉洋一郎氏と、これを主催した京都大学防災研究所の松波孝治氏と鳥取大学の西田良平氏の意向により、むしろ現場からの報告こそ住民の立場にたったシンポジウムとして意義があるとの認識があって、「その時みんなは…」が第一セッションにきました。

このセッションの報告を聞いてみると、阪神・淡路大震災と同規模の地震を受けた日野町で、被災が最小限にとどまったことは偶然ではないと考えます。学校や病院が地域の中心としての役割・活動を行い、保健婦をはじめ行政の方々も自分達が被災していながらも被災住民の支援活動に従事できたのは、ひとえに、住民相互がお互いをよく知っているため、だれが、いつ、どこで、どのような救援を必要としているかの情報を早く入手できたからであると考えます。さらに、町のコミュニティ活動が失われていない状況の中で、行政が災害時の広域的対応と狭域的対応を迅速に行った

事、住民相互の協力と全国のボランティアの支援があった事等も大きな要因であったと思います。

今回の、現場からの報告や災害対応の報告が、今後の災害時の対策に役立てられんことを願っています。

2.2 震災発生時からおよそ1週間を通して

矢田貝 勝*

2.2.1 震災発生直後における自己行動

①震災発生時では

- ・家族の安否とガスの元栓等の火元を確認することが精一杯で、被害状況も確かめずに家族3人で外に出る。
- ・周囲の人から母屋を指摘され、「花が開いた花畑」のような状態になっているのを見て、ただ茫然としていた。
- ・隣家は留守らしく、96歳のおばあさんが一人でオロオロしているのを発見し、家内と二人で外へつれ出す。
- ・自己の立場が民生委員であるということに気付かされる。

②自己の立場に目覚めて

(民生児童委員として)

- ・隣家のおばあさんを老人福祉センターにつれていってもらおうように家内に依頼して、担当区の主に独居高齢者の安否確認へと行動開始する。
- ・特に上三区の被害状況はひどく、将棋倒しのようになっていたが、独居者全員無事であることを確認し4時過ぎに自宅へ帰る。
- ・公民館長より電話があり、自治会長を招集して避難場所等について相談する体制を整える。

(黒坂地区連合会長と下三区区長として)

- ・町部の自治会長だけの出席だったが、今すべきことのみ絞って協議する。(行動先決の思いから)

* 黒坂地区連合区会会長

- (1) 現時点で福祉センターと公民館に避難している人達は移動させないで、今後は、駅前通りを境にして、上は学校の体育館へ、そして下は公民館へ避難させる。また、高齢者は福祉センターに避難するように、各自治会ごとに連絡指示をする事を決定する。(来ていない自治会には公民館長より連絡してもらうようにした。)
- (2) 各自治会ごとに被害状況が異なるので、大まかな被害状況を調査し、夜間の警備体制を自治会ごとの状況にあわせて編成するように依頼する。
- 区内の防災委員は一応決めてはあったが、何分初めての体験ゆえ、連絡漏れや不徹底になってはと思います、自ら区内全戸に連絡してまわった。その足で、学校に行き体育館を避難所にしたことを願います。(学校長は快く引き受けてくださり、職員で体育館掃除をされ、その夜から避難所の解除まで男先生が交替で宿泊される。)

2.2.2 自衛的な防災組織の必要性について

①緊急自衛夜警編成を通して

(地区内組織機能の不徹底さ)

- 一応、防災委員は決まっていたとしてもその認識がなく、口コミで5人(50代)の男性にお願いして、学校前通りと駅前通りの2班編成とし、21時、24時、3時、6時に見廻りをおこなった。(区民のほとんどが避難生活していた3日間の編成)
- (緊急時における情報連絡網のあり方)
- 地震発生の夜、夜警をしていた3時頃、在部のある方が北陸方面の出張から急遽帰宅してきたが、家には誰もいないので捜しにでてきたということであった。3ヶ所の避難所にいってもらったが、どこにも見当たらなかった。実際には、近くの小屋に避難しておられたことが後でわかった。特に在部には避難所等の情報連絡が行き届いていなかったことが、後日になって判明した。

- 避難所にいるため、殆どの家が留守宅となっていたので、夜警の最中に各家の電話がひっきりなしに鳴っていた。多分、親戚・知人等からの安否を気遣っての電話であっただろう。(避難者の応急的名簿の作成と緊急時における有機的な情報連絡網のあり方の必要性を感じる)
- 地区としての防災組織がしっかりしていれば、情報連絡等も通信網だけに頼らなくても、人海戦術で徹底できたのではないかとも思った。(自治会長 班長 防災委員等の有機的な連携プレー)

②避難所体制の中で感じたこと

(コミュニティ的発想による炊き出し体制づくり)

- 夜警編成の相談が終わって8時頃、避難所となっている体育館に行ってみると、公民館で4・5区のご婦人を中心に日赤奉仕団や他地区のご婦人達が炊き出ししてくださった「おにぎり」が残っており、ありがたく頂いた。
- 小学校の体育館は80人余りの避難者であったが、夜警を終えて朝6時頃避難所へ行くと、数人のご婦人が各家庭の材料を持ち寄って味噌汁の炊き出しをしておられた。感謝の言葉を述べた後、駐車中の車の中で仮眠する。

(早期における食事給付と給水体制への感謝)

- 9時前に仮眠から目覚めると食事の給付があり、炊き出しの味噌汁と共に有難く頂いた。
- 給水に関しては、学校の浄化水槽タンクが満杯だったおかげで助かっていたが、東部の国分町から給水のために早朝にも拘わらずやってこられた。各家庭では断水になっていたため、地域民は感謝しながらそれぞれの容器に給水してもらう。

③実働的な防災組織の必要さを実感して

- 「よもや黒坂で…」という安易感が反って災いし、各地区共名前だけの防災委員

になっていた。そのため、各自治会長はそれぞれのところで、孤軍奮闘しながら奔走したであろうと思う。

2.2.3 震災からおよそ1週間を通しての諸問題

①後片付けや応急処理に没頭する中で

(地区民の精神的な不安定さの中で起こった現象)

- ・度重なる破損状況調査に対して、住民の間では混乱が生じ、一時はパニック状態になっていた。しかし、罹災証明の手続き等により落ち着きを取り戻し、今では調査の対象が何なのかも理解しているようだ。
- ・当初は対策本部からの情報等(シートの入手方法や後片付けのボランティア依頼)が、特に在部を中心につかめず、防災無線と共に自治会長宛にファックスが届くようになって、情報が徹底するようになった。

(純粋なボランティア活動と悪徳業者まがいの区別がつかないで、困惑していた地域住民)

- ・主に高齢者から、壁等の修理を契約するためにシート張りをおこなったりして高額の修理契約をしてしまったと耳にし、消費生活センターに、問い合わせの取り消し作業をおこなう。このことから、担当地区の高齢者には、見極めができない時は相談してもらおうか、自らが断るよう話しておいたため、純粋なボランティアの方には反えて迷惑をかけてしまったように思う。その後、ボランティアの方は名札をつけるようになり、また自治会長を仲介にして取り組むようになってからは、感謝する声が多く聞こえるようになった。

(精神的なケアを含めた診療への感謝(高齢者を中心に))

- ・高齢者を中心に、精神的な不安定や疲労

から、血圧等があがったりしていたが、精神的なケアを含めた診療が日野病院や保健婦を中心に(ボランティアの方も一緒に)行われ、住民から感謝の声が上がっていた。

2.2.4 反省と課題

- 1) 日常から各自が防災認識をしっかり持っておきたい。
- 2) 緊急時における情報網を徹底化させる手段を考案しておく。
- 3) 地区全体の自衛的な防災組織を再構築しておく。
- 4) ボランティア活動に対する認識を各自がしっかりと持って、自らもボランティア活動に参加するように心がける。

2.3 日野町におけるボランティア活動について

細田 耕治*

最初に行われたボランティアというのは、隣近所の助け合いの活動ではなかったらどうかと感じています。普通、そういうものはボランティアのくくりでは語られないものであると思いますが、このセッションは「その時みんなは」というタイトルでありますので、あの時を振り返ってみます。

例えば、道路に散乱している屋根瓦を取り除いたり、倒れたブロック塀を取り除いたりといったことが最初のボランティアでありました。さて、一般的にいわれるボランティア活動について話を進めたいと思いますが、震度6クラスの地震が起こったというニュースが報道されますと、阪神・淡路大震災以降の日本では、これは行かなくちゃいけない、という思いで直ぐ行動されるボランティアの方々がたくさんいらっしゃいます。

鳥取県西部地震でもそうでした。発生直後から日野町等へ全国から志の高いボランティアの方々が動き始められました。日野町にも、その日の夕

* 日野町ボランティアネットワーク